

趣 旨 説 明

田 中 毎 実（京都大学高等教育教授システム開発センター・教授）

今日は雨で足場の悪い中を、このように多数集まっていただきまして、ありがとうございます。ここに、どういう方々が参加しておられるのか。私たちの方も、十分把握してるわけではありません。事前に、懇親会に参加される方だけは、チェックさせていただきました。これを見ますと、東北から四国まで、全国にわたって参加者がいます。今回、特に多いのは、どうやら関東の国立大学のFD関係者ではないか、という印象を受けております。いずれにしても、今回のフォーラムの主題が、参加されている多くの方々のシビアな問題意識とうまくかみ合っている。こういうことだろうと、考えております。

趣旨説明というのは、当初ご案内しましたプログラムには、入っておりません。けれども、私どもが何度か打ち合わせを繰り返すうちに、討論に入る前に趣旨説明をしておいた方が良いのではないかと、ということになりました。

最初に、若干、事務連絡をします。プログラムには今日の日程を、細かな時間も含めて書きました。しかし、今回のフォーラムの趣旨からしまして、稲垣先生につきましては、きちんと時間をとって、お話をさせていただきたいと考えております。それ以外にも、どうしても時間は延びがちでしょう。休憩を切り詰めるようなことも、あるかと思えます。会場のすぐ外に、喫茶の用意がしてあります。適宜休憩をとっていただき、お茶でも飲んでいただいたらと思っています。

さて、趣旨説明です。実は、お渡ししている資料の中に、趣旨説明の文章が2種類入っています。ひとつは、プログラムに書いてあります。まず、このプログラムをご覧ください。表に、軽妙な田村雄一名誉教授の絵が、印刷されています。これは、私どもが学内施設であることについて甘えてしまい、『京都大学百年史』から、ことわりもなしに使ってしまったものです。この点、ご迷惑をおかけした関係者の方々に、この場を借りて、深く謝っておきたいと思えます。私の趣旨説明は、もうひとつの印刷物の方です。

総長からもお話をいただきましたけれども、私どもが実施しております公開実験授業は、3年間で一応の区切りをつけまして、2期目の計画に入る段階にあります。そこで、3年目までの中間総括と、次の3年ぐらいの実践のための理論的前提をつくっておきたいと思っております。これが、今回のシンポジウムの基本的な趣旨であります。

公開実験授業では、この講演室を使っています。ご覧のように、随分古い部屋であります。西田幾多郎先生が定年退官の記念講演をされたのは、たぶんこの部屋であろうと思っております。あるいは、この部屋のすぐ下の会議室であるのかもしれませんが。楽友会館であることはたしかですけれども、ここか、下かは、よくわかりません。下かもしれません。何しろ大正14年築の建物で、歴史的建造物に指定されていますので、なかなか手をいれることができません。使い勝手という点では、困ったことです。

私がそこでしゃべり、学生はそちらで聞いている。その後ろで、10数名の参観者が見ている。ビデオカメラで撮影していることも、大切なことです。ビデオカメラは、だいたい今のところ5台設置しています。けれども、この部屋はセンターのものではありませんので、カメラを固定するわけにはいきません。いちいち設置して、授業が終わったら、撤収する。これを繰り返します。ずいぶん手間がかかります。ビデオは、研究にも検討会にも使う。もっとも、検討会ではまだ十分にうまくは使えていないんです。それはともかく、参観者の人達と隣の部屋で、授業が終わったら検討会をやる。こんなことを、3年間続けてきたわけです。

合計すると、たぶん70回ぐらいの公開授業と検討会をしてきたことになります。この企画の趣旨は、3つあります。ひとつは、授業実践をきちんとするという。もうひとつは、授業をフィールドとした研究をするということ。つまり、短期的・長期的な授業研究をやる。もうひとつは、参観者を交えて相互研修をするということ。この3つを考えていたわけです。すべて上手くいったかどうかはわかりませんが、今は3年目の総括をする本を出版する準備をしております。たぶん、今年度中には、その本を出版できると思っております。

さて、私どもがそういうことをやっている動機の一つには、実は、今まであちこちで言われてきたようなフェカル

ティ・ディベロップメント、つまりFDに対する批判ということがあります。私どもは、これまで言われてきたようなFDでは、とても具合が悪いと思っている。理由はこうです。

まず、今までのFDは、とすれば、教員個人が自分の能力、わけても教育能力を開発していくことであるという具合に、ずいぶん限定して受け取られてきている。そう思います。ファカルティの能力というのは、けっして個人の能力であるわけではありませんし、わけても「教育」の能力だけであるわけではありません。かりに個人の「教育」能力だけに限って考えてみましても、これを、まるで個人の持ち物でもあるかのように外から植え付けることができるのか。この点は、まず、徹底的に疑ってかかるべきです。

本来の教育能力は、教員と学生との間の日常的な相互行為の中で、生きて働く力です。そういう具体的な文脈から離して、まるで持ち物みたいに運んだり、与えたりできるのだろうか。そう思う方が、変ではないでしょうか。けれども、これまでは、とすれば、そういうFD観が支配的であったような気がいたします。無意識のうちに、学生との相互行為という生きた文脈から離れた、まるでモノのような「能力」をイメージする。そこで、これを、伝達講習のような仕方で、上から植え付けることができるかのように考えてしまう。そういうことではないかと思えます。

大学の教員は、自立自営の経営者でありまして、「何をどう教えるのか」ということについて、ずいぶん高度な自己決定権をもっています。そういう自立的な経営者に、「こうすべきだ」と上から教え込むようなFDを考えるのは、おかしいわけです。対等の同僚が皆で寄り集まって連携する。お互いに話しあったり、議論しあったりしながら築いていくという、相互研修の在り方こそが、FDの本来の在り方だと思います。そんなFDをやりたい。しかも他人事ではなくて、自分たちの授業実践をフィールドとしながら、相互研修をやりたい。それこそが本来のFDである。そう思ってます。私どもの公開実験授業は、そういう意図をもって、やってきたわけです。

実は、私どもがこういうかたちでFDに批判的な意識を抱いてきた、原動力があります。それが、実は、稲垣先生のお仕事です。そこで、今日は、稲垣先生の基調講演をもとにして、シンポジウムを組んでいきたいと考えています。

後で、センター長から紹介いただきますけれども、稲垣先生は、長い長い研究歴と教育歴をもっておられます。そのお仕事は、私どものどうしても外すことのできない実践的・理論的な土台になっている。こういうふうに、考えております。さしあたってまず、先ほど申し上げました考え方、つまり、教員の教育能力は、生徒との相互形成の過程、相互行為の過程で生きて働く力だという考え方は、稲垣先生の教授学の一番根底にある考え方であります。さらに、教員がお互いに実践のフィールドをもち、それを基盤にしてお互いに向き合っ、相互研修をやっていく。この発想も、稲垣先生から学ばせていただきました。先生の言葉で言いますと、「カンファレンス」です。こういうものから、私どもは、学んできたわけであります。

こういう稲垣先生の教授学などをしっかりした土台にしながら、若い世代が自分の仕事をしてきた。ご覧になったらおわかりのように、みなさんの正面、こちらの方は、比較的年寄りが座っています。けれども、向こうの方は若くて、職階でいっても全部助教授の人が座っております。この若くて最先端の研究をやっている人たちが、その成果を今日話してくれます。稲垣先生につくっていただいた土台を元にしてみんなで走り出して、どこまで行くことができたのか。それを、若い世代の人々のお話は、示すことになると思います。

稲垣先生にまずお話をいただく。そして、私どもがそこから出発した土台がどこにあったのかについて、今一度振り返って、確認しておきたい。それが、今日の企画のひとつの趣旨であります。次に、その土台に基づいて私どもは、今どこまで行くことができているのかを確認する。つまりそれを、若い人々のお話で確認する、というのが第二の趣旨であります。以上のお話を前提として、お互いの発表者同士が、あるいはフロアーからの議論を交えて、本当の意味での相互研修をやりたい。それが、三番目の趣旨であります。そういうかたちで、今日の議論が実り豊かに展開されますように、期待したいと思っております。